

鷗友学園女子中学校

二〇一四年度

三次入学試験問題

【国語】 時間 50分

【注意】

- 1 試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。
- 2 問題は10ページまであります。試験中に汚れや不足しているページに気づいた場合は、手をあげて監督かんとくの先生を呼んでください。
- 3 問いに字数指定がある場合には、句読点なども一字分に数えます。

受験番号	氏名

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

長崎の植木職人・熊吉は、出島通詞（Ⅱ通訳）の家の庭で、蘭語（Ⅱオランダ語）とその意味らしきものが書かれた帳面を拾い、夜一人になるとそこに書かれた蘭語を夢中で憶えていった。その後、熊吉は出島の商館医・シーボルトにやとわれて、園丁（Ⅱ庭師）として薬草園の整備をまかされ、半年ほど前には「ばたびあ」（現在のインドネシアの首都ジャカルタ）に茶樹の種を送り届けるために独自の工夫をした。ある日、シーボルトの薬草園に鳴滝塾の塾生たちが訪ねてきた。

翌朝、熊吉は薬草園の小徑に片膝をついて薬草の手入れをしていた。

すると騒々しい声の群れが近づいてくる。薬草園の扉の前があつという間に塾生で溢れ返った。四十がらみの者もいれば、元服してわずからしき若者もいる。

本来、出島への出入りには厳しい取り決めがあり、門前にも禁制の木札が掲げられている。奉行所の許可を得ずともここに入りできるのは高野聖と呼ばれる僧侶と托鉢の僧侶、そして遊女だけである。その他の者は相応の理由が無ければ、通行証となる出島門鑑を発行してもらえない。

だが、こたびの商館医は大変な腕利きだ、切れる俊才だと方々で名が上がり、諸国から蘭方の医術や本草学、博物学を学ぶ者が先生の元集まってくる。皆、蘭語に習熟しているので、稽古通詞や見習通詞という身分を名乗って出島門鑑を手に入れるのだ。無論、それは方便で、奉行所も薄々は気づきながら目をつぶっているらしい。

① 「先生御自慢の薬草園はここにござるか、いやはや見事なものよ」

「木枘がこうも整然と並んで、まるで芝居小屋のごとくぞ」

「この作庭法は阿蘭陀式でありましょうな。木本類に草本類、羊歯類、さらにそれぞれ細かく分けて枘に納まって、実に理に叶うておりますぞ」

「なるほど、理に優れた先生らしい。薬草としての用を整然たる美にまで極められるとは、誠にもって恐れ入りますな」
先生はまだ到着していないのか、声が聞こえない。

「いやいや」と、誰かの声が響いた。

「ここは、先生に仕える園丁が一人で拵えたらしかですぞ」

「ほう、それは大したものでござりますな」

「しかも痛快なことに、その者はあの桐、ほれ、西側に植わっておる大きな桐の木がありましたよ。あれは肥前の鍋島侯から贈られた名木であるらしかですが、勝手に館の庭から盗んでここに植えたらしかとです」

男がよく通る声でさも可笑しそうに言ったので、皆、呆気に取られている。いくら何でも「盗んだ」とは人聞きが悪いと、熊吉は身を屈めた。先生はあの日の顛末を喋ったのだろうか、いや、奥方かもしれぬと思い、あんお人はほんまに油断がならぬ、気を許さんようにせねばと熊吉は肚の中でぼやいた。

②「やばんの職人は途方もな腕と知恵を持っておると、先生は大層感心されておりましたぞ。草木のあるべきようがわかり、それに最もふさわしい場を用意できると」

男は先生とどうやら親しい間柄らしい。

「けど、それは当たり前のことやおませんのか。職人いう者は、そんなもんだすやろう」

「いや、西洋ではかように事は運ばぬらしかです。ちと目を離すとたちまち手は抜いて、いい加減な仕事をする。まして己の頭で考えて動くなど、身分の低い者にはあり得ぬことと聞き申した。西洋の使用人は皆、牛馬のごとき扱ひを受けていると耳にしたことがあるばってん、さもありませんではなかつたか」

②熊吉はしやがんだまま、首だけをひねった。声の主は、三十がらみの小柄な男である。物言いは捌けているが、鼻筋が通り、品の良い口許をしている。

「先生」

男が晴れやかな声を出した。芝庭から先生が歩いてくるのを見て、塾生らは一斉に辞儀をした。先生が皆を引率するように菓草園に入ってきたので熊吉も立ち上がって頭を下げ、すぐにまた片膝をついて手を動かす。

③一群は盛んに言葉を交わしながら園内を巡り始めた。

「ちよつと待つとくくなはれ、この菓草は何ちゆう名あでしたかいな。もいつぺん」

「明日葉ぞな」

「あしたばぞなですか。長つたらしい名あやな」

すると脇から別の者が注意する。

「ぞなは要らぬ。この御仁は松山藩であるゆえ、そなたの言う、だすつてのが、ぞなだ」

「何や、明日葉だすかいな。若葉はたしか、乳の出えを良うする草だしたな」

大坂の蘭方医らしい若者は独り合点している。

「それはそうと、先生、このあいだの白内障の手術もまた上々の首尾やつたらしおますな。ほとんど見えなかった者が光を取り戻したとか」

と言いかけ、その後を蘭語に変えた。先生はしばらく言葉を探すように黙っていたが、ゆつくりと蘭語で応え、若者はまた蘭語で問いを重ねている。先生が下手な蘭語を嫌うのはもはや有名なことらしいが、専門の医術や薬のこととなるとやはり原語でやりとりする方が確かなのだろう。まして皆、相当、蘭語が達者のようで、互いに蘭語で話し合い始めた。それぞれが諸藩の詛りを持つているので蘭語の方が手っ取り早いのだろうか。先生の教えは熊吉にもわかるほど懇切丁寧を極め、塾生たちは一言一句も聞き漏らすまいと帳面に書きつけている。

熊吉は顔を伏せるようにして、土にまみれた手をせつせと動かした。ほとんど毎日のように草木が届くのだ。苗だけでなく種や若木、成木、中には長崎では稀少な遠国の花木も混じっている。木枘は多めにしつらえてあったのだが、この調子では早晚、植える場所が足りなくなるだろう。

手暗がりになったので身をずらすと、塾生たちは園の中央にまで迫ってきていた。小径は二人が肩を並べるほどの幅は無いので、皆、一列になって歩いていく。先生が先頭なので、やばんの者の猫背と蟹股がいつそう目立つ。

「なるほど、この径は葉を摘んだり実や種を採るにも勝手が良か、というわけだ。しかも手入れが行き届いておる。黄変した葉の一枚たりとも、ここにはござらぬのう」

さっきの声の主がまた感心したように言い、誰かが先生に問いを發した。先生はしばらく黙した後、また丁寧に答えてやっている。先生はいつも、じつくりと考えてから言葉を口にする。時には途切れ途切れになることもある。姿を目にしていなければ、

教えを請うている塾生の方がよほど流暢に蘭語を操っているように聞こえるほどだ。

出島にさえ入れば通詞のように蘭語を喋れるようになると思ひ疑いもなかった熊吉の夢は、初日に潰えた。^(注3)だが己がさほど落胆しなかったことに熊吉自身が驚いている。毎日、薬草園の拵えやばたびあに送る茶樹の種の荷造りに無我夢中であつたし、「ほいつ」や「やー」を口にできるだけで飢えのような希みは満たされたのだ。肌身離さず懐に隠し持っていた帳面も、とうにこの薬草園の土の下に埋めてしまつてゐる。

だがこうして蘭語を操る者たちを目の前になると、己が無性に落ち着きを失うのがわかる。腹の中に納めた言葉の端きれがぴよんぴよんと飛び跳ね、「なにゆえお前は我らを使わぬ」と騒ぎ出す。

「コマキ」

先生の声が出て、跳ねるように立ち上がった。先生が伴っている三十人近い塾生がずらりと小径の端まで並んで、後列にも続いている。皆がこつちを注視したので、熊吉は首から手拭いを抜いて頭を下げた。

一步前に出た先生は、眩しげに目を細めた。瞳の色の薄い蘭人には、長崎の陽射しはひどく眩しいものらしい。

「ばたびあから文が届いたぞ」

「ほ、ほんまですか」

「ん。……よくやった」

「え、そいでは」

「成功だ。送つた三百五十のうち、枯れて死んでおつた種は一つもなかったそうだ。今、次々と芽が出ていると知らせてきた。こいで、ばたびあでも茶樹栽培を始められる」

「そげんですか……良かった、良かったとです」

熊吉は心底安堵して、何度も大息をついた。先生の顔にゆっくりと微笑が現れ、隣の男に顔を向けた。

「ショウ、この子だよ」

相手は、さきほどの声の主である。

「まさか、こげん若か園丁やったとですか。腕利きの爺様かと思うとつたが、こいはまた、私の弟と歳の変わらぬ……」

と後ろの列を振り向くようにして、しかしすぐに顔を戻して軽くうなずいた。

⑤ 某は、小通詞を務めおる吉岡正之進だ。本日は引率の大役を仰せつかつての。先生はまことに人遣いが荒か

吉岡が冗談めかして言ったので、先生は苦笑いを洩らしている。だがその名を耳にして、熊吉の腹の中でぴくりと動くものがある。確か、帳面を盗んだ通詞の家の門に掛かっていた表札がそんな姓だったような気がする。

「吉岡家というは代々、阿蘭陀通詞を務められる名家での、蘭方、蘭学を学ぶ者で知らぬ者はおらぬ。本草学においても一角のお方ゆえ、精々、ご教示を賜るが良い」

誰かが吉岡におもねるような口調を遣った。熊吉の腹の中で、またあいつらが「出してくれ」と飛び跳ねる。

「まいん、なあむ、いす、コマキ」

熊吉は辞儀をしながら、そつと胸の裡で呟いた。

と、吉岡という通詞が目を丸くしている。

「そなた……？」

門弟たちが互いに左右の顔を見合わせ、ざわざわと声を立て始めた。

はつとして、熊吉は棒立ちになった。胸の裡で呟いたはずのあいつらが、するりと口の外に飛び出していたのだ。えらいことをと悔いたが、出た言葉はもう拾って戻せない。

園丁風情が利口ぶるな。

先生が眉根を寄せるのを目の端で見たような気がして、唇が震える。

「か、堪忍してください。門前の小僧が、か、片言ば口にしました……」

すると吉岡は小膝を打つように笑い、後ろを見回した。

「いやはや。某より巧か蘭語ば口にするかと思うて、びくついたばい」

その途端、塾生たちがどつと笑った。熊吉も一緒になって、えへえへと声を立てて笑い、頭を掻いた。

けれど、おどけて見せれば見せるほど、胸の中が冷え冷えとしてくる。いったん潰えた夢の残骸がとうとう音を立てて消えてしまったことも、それを皆と一緒にになって嘲笑う己も悲しかった。

（朝井まかて『先生のお庭番』）

(注1)本草学……薬用となる動植物や鉱物について研究する学問

(注2)やばん……日本

(注3)潰えた……やぶれた

(注4)頤……下あご

(注5)某……わたくし

問一 ——線部①「奉行所も薄々は気づきながら目をつぶっている」とは、どのようなことですか、具体的に説明しなさい。

問二 ——線部②「声の主は、三十がらみの小柄な男である」とありますが、その男は、塾生たちが薬草園を見たときの誤った思いこみを正しています。何をどのように正したのかを説明しなさい。

問三 ——線部③『「ちよつとくぞなだ」とありますが、塾生たちの間で、ある誤解が生じています。それはどのような誤解ですか。誤解が生じた理由もふくめて説明しなさい。

問四 ——線部④「腹の中に納めた言葉の端きれがびよんぴよんと飛び跳ね、『なにゆえお前は我らを使わぬ』と騒ぎ出す」とありますが、これはどのようなことを示していますか、説明しなさい。

問五 ——線部⑤「おどけて見せれば見せるほど、胸の中が冷え冷えとしてくる」とは、どのようなことですか。「おどけて見せた理由もふくめて説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「貴重な自然を守ろう」——このような呼びかけに、頭から反対する人はあまりいません。特に生態学に興味をもたない人でも、水や空気がきれいになることを望み、春に花が咲き秋に紅葉が訪れる日本の自然を好ましく思っているのではないでしょうか。しかし、自然を守るために何かを犠牲にする必要が出てくると、とたんに人々の意見は分かれます。「自然を守るためにお金を払ってください」「環境を守るために税金を上げます」なんてことになると、拒否反応を示す市民のみなさんもいることでしょう。私たちは誰でも、自分の財布からお金を出すことは渋るものです。でも、自然保護はタダでできることではないのです……。

環境保護の観点から、先進国では厳しい法律の規制があります。自動車や工場からの排ガスや排水は厳重に管理され、汚染源となる物質の濃度が基準値以下になるように監視されています。最近では地球温暖化の原因となる二酸化炭素の排出を制限するため、炭素税を導入した国もあります。日本でも導入の検討がなされています。このような規制や課税は、産業界からみれば、発展をさまたげるジャマものなのかもしれません。

美しい自然やさしい環境を守るのは望ましいことですが、それはタダではありません。いろいろな税金や規制がつきまといます。このため、「自然保護と産業やビジネスは両立しない」という考えをもつ人がいます。自然保護を進める人たちのなかにも、「産業や大企業は環境の敵だ」みたいな考えをもつ人がいるのに対し、産業界にも、「自然保護は経済発展のジャマものだ」という人がいます。私はどちらのタイプの人も知っています。環境に関わる仕事をしているとよくこういう意見を聞きますし、そんなとき、大学の教員はよく板ばさみになるのです。

しかし、こういう状況のなかでも、自然保護と経済発展はカタキ同士じゃないという考え方が近年世界中で広まってきています。そもそも生態学とは、「自然のなかでの経済学」というニュアンスですから、経済学の視点からも、そんなに無茶な要求はしてないんですよ。自然保護と経済活動は対立するというのは古い考え方なのです。

ここで鍵となるのは、「生態系サービス」という考え方です。生態系サービスのコンセプトでは、自然保護がどのように人間の暮らしに「プラス」になるかを具体的に示すことで、「自然保護は『得』になる」という考え方をしています。これならば、

ビジネスマンに嫌われなくてもすみそうですね。しかし同時に、自然を愛するナチュラルリストの側でも、「自然保護は高尚だから、損得勘定を入れるのは下劣だ」なんて考えを捨てなければなりません。自然保護は、一部の愛好家だけのものであってはなりません。スーパーでカップラーメンが10円安いと喜ぶようなわれわれ小市民でも、無理なく参加できるような自然保護でなくてはならないのです。

そもそも、なぜ環境問題が起こるのでしょうか。公害や自然破壊などの環境問題の根底にある原理について、アメリカの生態学者ギャレット・ハーディンは1968年の有名な論文で、「共有地の悲劇 (Tragedy of the commons)」というたとえを使って説明しました。むかしヨーロッパの牧畜を行なう村には、村人共有の牧草地がありました。村人は、みな自分の飼っている牛を共有の牧草地で放牧して、牛に草を食べさせていました。ある村ではこうやって長いあいだ牛を飼っていたのですが、あるとき村人のひとり、「ほかの村人よりたくさん牛を放牧すればお金がもうかるな」と気づき、それを実行したのです。すると、牛をたくさん育てたその人はお金持ちになりました。それを見ていた近所の人たちは真似をはじめ、みんながたくさんの牛を放牧するようになりました。すると、共有の牧草地の草はどんどん食べ尽くされていきました。最終的には、牛たちが食べる草がなくなってしまう、この村の牧畜業は破綻するにいたったのです。

このたとえ話から、私たちは何を学べるでしょうか。ポイントになるのは、牧草地が「共有」だったということです。もし、各家族ごとに私有の牧草地を持っていたらどうなっただでしょうか。牛の数をしだいに増やしていくと、共有地だろうが私有地だろうが、やがて牛を養いきれないときがやってきます。共有地と私有地で違うのは、村人のその後の反応です。もし私有地だったら、草がなくなると牛が飢え死にするようになれば自分が困るので、環境容量を超えたことがわかれば牛の数を減らそうとするでしょう。ところが共有地の場合は、環境容量を超えて草が足りなくなってきたことに気づいても、村人は自分の牛の数を減らしたがりません。村人Aが村人Bより先に数を減らすと、村人Aの収入は減ります。一方、数を減らさなかった村人Bは、村人Aが減らしてくれたおかげで、これまでと同じ数の牛を飼育できるのです。とつても不公平ですよ。そんなわけで、このままいくと村全体が破綻することがわかっていても、誰も自分から進んで減らそうとしないのです。

この悲劇から学べるもうひとつの要素は、持続可能性 (sustainability) という考え方です。牛の数が環境容量以下ならば、この村では未永く牧畜を営むことができたでしょう。このような人と自然の関わり方には、「持続可能性がある」といいます。

逆に、環境容量を超えた数の牛を放牧することは、「持続可能性がない」となりますね。持続可能性は、ものごとが「長期的に得」かどうかを判断するのに大事な判断基準です。この村では、みんなが短期的な目先の利益を追い求めたために悲劇が起こってしまったのでした。

ギヤレット・ハーディンが説いた共有地の悲劇は、いろいろな形で、世界中のさまざまな場所で起こっています。たとえば、^②現代の漁業は共有地の悲劇の典型的な例です。ここでは、お魚とお肉を比較してみますね。

牧畜で生産される肉も漁業で得られる魚も、私たちの体にとつてはともにタンパク源ですが、その獲得にいたるプロセスは大きく違います。現代に暮らす私たちが食べている肉のほとんどすべては、牧畜によって育てられた動物に由来しています（野生動物の肉はほとんど口にしませんよ）。そして牧畜に必要な牧草や飼料は、ほとんどすべて私有の農地で生産されています。だからお肉については、原理的に共有地の悲劇が起こる状況ではありません。たとえば、牛肉を食べるのが大流行したら、牛は絶滅の危機に瀕しますか？ そんなことはありません。それどころが、むしろ世界中の牧畜業者は牛の飼育頭数を増やし、それにもなつて牧草や飼料を増産するので、世界の牛の数は増えるのです。

ところが漁業では、いまでも漁獲高の大きな部分は、「野生」の魚からきています。養殖がさかんになってきたとはいえ、それは世界の漁獲高のほんの一部にしかすぎません。共有地の悲劇は、特に公海上で獲れる魚の場合に顕著にみられます。自分の国の経済水域なら、その国のなかでの規制で獲りすぎを抑えることもできますが、世界中どこの国の漁船が操業してもよい公海上となると、状況はまさに「獲ったもん勝ち」です。資源の枯渇に配慮して獲りすぎないようにする国があつても、そのぶん他の国が獲るだけなのです。長い目で見たら水産資源の量があぶないことはわかっていますが、自分だけやめると損をするので獲りつづける……。世界中でお寿司を食べるのが流行すると、クロマグロが絶滅の危機に瀕するのはこういうわけです。

そのほかには、公害問題にも共有地の悲劇がつきまといまいます。たとえ環境に悪い物質でも、そのまま垂れ流せば処理の費用がかからず安上がりですよ。もしも環境に悪い物質の適切な処理を自主的にやる企業があればどうなるでしょうか。そのための費用によって経営が圧迫され、他社との競争に負けてしまうかもしれません。このように、経済活動と環境問題は、共有地の悲劇という原理で密接に関係しています。

（伊勢武史『学んでみると生態学はおもしろい』）

問一 — 線部①「自然保護と産業やビジネスは両立しない」とありますが、それはなぜですか。本文中の「二酸化炭素」の例を使って、説明しなさい。

問二 — 線部②「現代の漁業は共有地の悲劇の典型的な例です」とありますが、筆者が「現代の漁業」を「共有地の悲劇の典型的な例」としてあげているのはなぜですか、百字以内で説明しなさい。

三

各文の — 線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 話をできるだけだけカ|ンケツ|にまとめる。
- (2) 意味シン|チヨウ|な話しぶり。
- (3) もう|けを二人でセツ|パン|する。
- (4) 化け物をタイ|ジ|する。
- (5) 大通りでシユク|ガバ|レード|が行われた。

